



1982年から活動を続けている小山悦子は、既に85年にロックバンド・サザンオールスターズのレコードジャケットに使用され、ヨシダヨシエ、ワシオトシヒコ、千葉成夫らに評価されているベテランである。今回小山は、様々なスタイルのキャンバスに油彩の作品を、27点、出品した。

何とも多作家である。アンフォルメル的抽象から、ルオー的具象に至るまでの作品を描いている。その二者の「間」に位置する様々な線と形を描いていくのだから、その制作力は並ではない。それどころか、筆致を使い分けている点に注目したい。

マチエールを重く盛り上げるかと思うと、絵具を飛ばしてアクションペインティング的世界を構築する。普通、筆致が多様化するという事は、それだけ、描く素材が変容する筈であるのだが、小山の場合、キャンバスに油彩と一貫している。

これは何を意味しているのでしょうか。それは小山が手先や頭の中ではなく、心で描いていることに所以する。



小山はステップスギャラリーに於けるこの度の初個展で、カタログを用意した。小山はここに、以下の『伝導の書 3章』を引用している。一部、転載する。「天の下のすべてのものには、その時がある。(中略・引用者) 神はすべてのものを、その時にかなったものとして美しく創られた。」

つまり小山は、当然自らの意志が働いているのであろうが、自らの意志よりも、シャーマンの伝達者として、天の、地の、ここに生きている者だけではなく、既に亡き者も含めた、総ての人間の意志を描いているのではないかということが出来るのではないだろうか。

そのような見解以外にも、今回の作品の大半に《シャコンヌ》という作品名が付けられていることにも気をつけたい。シャコンヌとは音楽用語で言う三拍子の舞曲の一種である。バッハのシャコンヌなどが著名である。確かに小山の作品は音楽的な流動感を持つ。

そして同時に、踊りが持つ人間の運動も含められている。ここにもやはり、人間の姿を確認することができる。

